
ヘタレな俺に押し付けない！

冷やパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレな俺に押し付けない！

【Nコード】

N1394BA

【作者名】

冷やパイ

【あらすじ】

主人公《霧島冬夜》

特徴… アルビノという病気により白 銀髪

相棒… 人口知能^{アイ}AI

人口知能と人間のボケ、ツツコミ ほのぼの系二仕上げました

死亡フラグや恋愛フラグなどのほのぼの系？*

昼間の残暑が少し弱くなった夕暮れ。

「少し暑いな」といつて第二ボタンまで開き、ネクタイを少し緩くする。それでもまだ暑いらしい、今度は手扇であおぎだした。

少年は一人で放送室の機材を何やらいじくっている。最後にコンセントを差し込む。やっと満足のいくようになったのだろう。

ふう〜と長いため息をついて座った。

『お疲れ様です。マスター』と音声合成したような声が聞こえる。彼の作った人口知能AIの合成音声だ。

「レンに後で放送室のマイクは直したと伝えておかないとなあ」

「さてと…帰りますか。」 『蓮さんは、今日生徒会で一緒に帰れないそうです。』

「マジで?!」 一緒にマック行こうと思ってたのに「残念そうに少年はしゃべる。」

「ん〜じゃいいや、アイ 学校〜家までの最短ルートを頼む」
『ラジャー』

ここで読者の人は疑問を感じるだろう。彼が何者で、どうやって人口知能AIと話しているのか。彼、《霧島冬夜・キリシマトウヤ》はどこにでもいる高校生!?

ちよつとメカが好きで、仕様がない発明が趣味。

アルビノという病気により、髪が白…銀ばい感じの髪色になっているだけの高校生。

相棒は人口知能A I「アイ

彼は奥歯に仕込んだ超小型送信機を使ってA Iに指示している。この送信機は、口を開かなくても歯の動きで言葉を送信している。耳に付けている超小型受信機で情報を開き、伊達メガネにA Iからのデータを見ることができる。

「アイ、本当にこの道からが最短距離なのか？」

彼が今立っている位置は、正門とは逆の裏門に立っている。そこから先は、いかにも何か問題がありそうな薄暗い路地裏が続いている。

『愚問ですね。マスター、私は世界最高の人口知能ですよ。ワタシが“Y e s”と答えれば、その答えは絶対“Y e s”なのです。』

「もし、アイが人間なら胸を張って、答えているだろう。」

“つまり…通れと…”

「あと…言いたいことがあんだけどよ。」

『え、あ、愛の

告白ですか／＼／』

「ちげえ／＼よ

！一応オマエ男という設定だからな？ あと萌えキャラボイスでその言葉を言うんじゃない？。なんか悲しくなるだろうが（泣）」

はあああ（へへ）疲れた。息を吸い込み、大きく吐く。

いくらか落ち着いたところで

「俺が言いたいのは、このルート通り進んだら住宅を突っ切るじ

やねえか!!」

『マスターならやれる。幸運を祈ってる(・・)(ゞ』
もう突っ込む気にもなれない。

死亡フラグや恋愛フラグなどのほのぼの系？* (後書き)

楽しんで頂けましたか？感想下さい？？

「どうしよう…」思わずそんな小さなため息が聞こえる。

Q 何で、女の子は困っているのでしょうか？

1、夜にケーキを食べたくなったが、カロリーを気にして食べようか食べないかで迷っているから

2、服で迷っている

3、トイレに入りたいのだが思ったよりも人が並んでいて、列から出て他の場所にしようか迷っているから

A 正解は44の「下心丸見えの男子生徒三人に囲まれているから」でした。

ごめん。ちょまじで《六法全書》とか投げつけないで（泣）、ヒロインを守るヒーローがもうすぐ到着する予定だから。

マジい？ちよつとこのままだとヒーローの到着が遅くなる！？

んゝしかたない（泣） 解決方法はこれだ。

トウヤside

「ん…な、なんだ」思わずすっ飛んきような声がでる。 もう一度メガネを取ってゴしゴし手で目をかく。

目の前の風景が変わったのだ。アイのルート通りに進むと住宅にぶつかるハズ、なのだがぶつからない。つまり、アイの出した最短ルート道理に目の前が変わっているのだ。

「あれ、夢でも見ていたのかな？」

『どうしたのですか、マスター！。』

「いや、何でもない。」

2 (後書き)

感想下さい？

ルートどつりに路地裏を進んでいくと。

前方から女の子の声がしてきた。

女「やめてください。」

男1「なあ、いいじゃん」

男2「俺らと遊ぼうぜ」

男3「!!」

何やら言い寄られているようだ。

『どうやら女の子に告白したが、女の子がそれを断り、なおも強く女の子に迫っているような状況だと冬夜は見てとられる。』

「オマエが説明しているのかよ?!」

そうこうする内に、ニヤニヤしながら下心丸出しの女の子にいいよる。

『マスターに残された選択肢は3つ、逃げる、助けを呼ぶ、ボコボコにやられるの3つだけです。』

“落ち着け俺。。。AIにまともにツッコミや助けを呼んでいたら時間がなくなる。ぶっちゃけ逃げたい。膝が笑って力がでない。”

別に助けなくてもいいんじゃないんか。俺じゃない誰かが助けてくれるよ。そんな考えが頭をよぎる。

その時、アイがうれしいことをいつてくれた。

『マスターは、一人じゃありません。ワタシがついています。』

そうだよ。俺は一人じゃない。アイという心強い相棒がいるじゃないか。

『マスターにもう一度聞きます。女の子を助けますか？ ウィンノン』

秋月由紀 side

下心丸見えの三人に勇敢にいった。

「これ以上近寄らないで、近づいたら警察を呼びます。」

そう言って携帯を持ち出したが、あっさり男たちに取られてしまった。

男1 「どうする？頼みの綱は無くなったぞ。」

男2 「大声で叫んでみるよ、助けてー、って、くうく考えただけで興奮してきたぜ。」

男3 「叫べ、叫べ、叫べ」

だが、男たちもユキも分かっている。こんな路地裏で助けを呼んだところで、誰の耳にも少女の思い、声は届かないのだ。

“助けに来るのが、白馬にまたがった王子様じゃなくていい。誰でもいいから助けて”

その時だ！？ プロレスラーがつけているようなマスクをつけた男？が出てきた。身長１８０ぐらいのヤセ型だ。

そして、マスクの人が言った。

「や、やめるんだ。バイ。ンマン」

トウヤside

あれ、怖がらてない。むしろなんだろ…“誰かツツコメよ”

男三人と女の子一人呆然と立ち尽くしている。

素早く俺は女の子に“早く行け”と目くばせした。

女の子はすぐに理解して、一礼をして逃げ出した。“よし、俺の任務半分コンプリート”

『いい感じですよ。マスター。あとは女の子が十分な距離をとるまで時間稼ぎです。』

「わかってる。オマエもスルーするのか。」

『……………』

男三人達は、女の子が消えてしまったのに気づいたがもう遅い。

そしてチツと短く舌打ちし、俺に向き合った。

男1「てめえ、ぶっ殺すぞ。せつかくいい感じだったのによ。」

苛立ち気味に言う。残る二人も同じような顔している。

“落ち着け俺。打ち合わせ通りに動けば大丈夫。”ふうーと息を大きく吸う。

おもむろに、バックからグローブを二個取り出して手に装着。

ユキside

現れた時、思わず呆然と見てしまった。だって、こんな路地裏まで助けが来るとは、思ってもみなかった。

そして、すぐマスクの上から何故かメガネを掛けている救世主？の思っていることが分かったから今走っている。

普通に考えれば、誰か助けしてくれる人を呼びにいくのがセオリーだ。

少女の頭には、そんな考えがなかった。

「大丈夫かな…あの人。」

マスクの人が男たちにフルボッコされてないかが心配なのだ。

少女の足は、逃げるのではなく逃げ出したあの現場へと足を動かした。

トウヤ s i e d

トウヤは男三人に囲まれてしまい逃げ出せない。

男たちの中には、どこから持って来たのか鉄パイプを持った奴もいる。

鉄パイプを持った男が突っ込んできた。トウヤは短く「見切り」と言った。

そうすることにより…

伊達メガネに人口知能アイから敵の攻撃予想ポイント、時間、威力を瞬時に計算しレンズにそのデータを映し出す。

「左上からの振り下ろし、俺の頭に当たるまで一秒半、鉄パイプの重さから考えて頭蓋骨損傷じゃすまなそうた。」

他人言のように言っているが、これは超高度テクなのだ。

このテクは、見えてなくても大丈夫。

後ろの男がラリアットするのだってわかる。

男2の後ろからリアットが何故くるとわかるか？

アイは、人の呼吸、気流の乱れ、立ち位置、身体の重心、などの細かいデータから導き出したのだ。
さすが世界最高の人口知能。

タイミングを合わせ俺は身を屈めると頭上を腕が通過する。そして、計算されたようにそこに鉄パイプが振り下ろされる。

鉄と骨の鈍い音がする。男2が地面をのた打ち回って何か言っている。

全て他人言のように思えてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394ba/>

ヘタレな俺に押し付けない！

2012年1月9日21時46分発行